

栄養と化学物質と健康の接点

青木 康展

Contact of Nutrients, Chemicals and Health

Yasunobu AOKI

Research Center for Environmental Risk, National Institute for Environmental Studies,
16-2 Onogawa, Tsukuba City 305-8506, Japan

化学物質と言うと一般には化成品などのヒトが作り出した化学物質 (man-made chemical) を指すことが多い。したがって、栄養と化学物質とは一見関係がないように見える。しかし、食品成分も広い意味では化学物質であり、体外から取り込まれたものが健康に影響を及ぼす点では、両者は関係がある。化学物質 (man-made chemical) のリスク評価の体系は、基本的には体内にもともと存在し得ない化学物質の摂取を前提に成り立っているところがある。その一方、栄養とは元来食品中に含まれる成分の影響を考える研究領域であったが、食品成分の食品への添加がより一般的なこととなり、従来にはあり得ない量の食品成分を摂取する可能性も現実のものとして考えなければならなくなった。リスク評価の観点からみても、栄養と化学物質は大いに関係あると言うべきであろう。

残念ながらこれまで、栄養と環境中の化学物質の影響を同時に議論する機会は少なかった。そこで本シンポジウムを早川先生のご提案により企画した次第である。シンポジウムでは、体外から取り込む様々な化合物がヒト (生物) の健康に及ぼす影響とその評価手法について、食品成分としての摂取の観点 (木苗先生、斉藤先生) と環境からの化学物質の曝露 (岩田先生、早川先生、鈴木先生) の観点からご講演頂いた。各先生のご講演を総説として以下にまとめて頂いた。最後に総合討論を行ったが、活発な議論となり有意義にシンポジウムを終えた。

総合討論の冒頭、各パネラーに改めて今後展開す

べき重要な研究課題の指摘を頂いた。食品成分研究の立場からは、これまで食品として摂取してきた化合物を疾病予防に活用することの重要性が指摘され、また、環境化学物質研究の立場からは、環境中の化学物質存在量の実態把握・予測と曝露による影響評価の必要性が改めて指摘された。ヒトにとって有効と考えられる成分であれ、有害と考えられる成分であれ、健康への影響を評価するための方法論は不十分であり、今後その開発をさらに推進することが求められていることが総括された。

フロアーからは、いわゆる健康食品に関する質問が多く寄せられた。特に、直接市民と接した経験に基づく実践的な質問が多く、市民に健康食品に関する正しい情報を伝える必要があることを、フロアーとパネラーともに強く認識した。具体的には、医薬品と同じような治癒効果を期待して長期間摂取し、場合によっては、有害作用が発生した事例も紹介された。古来より食品として摂取してきた成分とはいえ、多量に摂取することにより発生する問題を明確にした上、その知見を市民に広めていく必要性が確認された。

最近、特定保健用食品の専門家の認定制度が開始され、その一方、調剤薬局で健康食品などを販売するため、管理栄養士を採用していることがパネラーより指摘された。食品成分が薬効に影響を及ぼし、場合によっては有害作用を発生する場合はしばしば指摘されている。本シンポジウムを開催して、薬剤師あるいは薬学人も栄養について幅広い知識を持つ必要性が痛感された。また、医薬品、食品成分、化成品、環境化学物質はともに体外から摂取される化学物質であるが、市民への情報提供は別々のチャンネルから行われている。このチャンネルを一元化す

ることが今後の大きな課題になるであろう。

医薬品、食品成分（特に添加物）、農薬、化成品などは法律等の管理下にある化学物質であるが、その管理はかならずしも体系的とは言えない。広い意味での化学物質摂取による健康影響の問題を根本的に解決していくには、これら化学物質のリスク評価

やリスク管理の体制も一元化する必要があると思われる。また、化学物質のリスク評価・リスク管理の人材育成や、科学技術の成果のアウトリーチ活動の一環としてリスクコミュニケーション活動に薬学の世界がどのように関与していくかは今後の課題であり、解決すべき問題は多い。